
Fateに転生、惨劇回避

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e に 転 生 、 惨 劇 回 避

【Nコード】

N 1 6 1 7 Y

【作者名】

リヨク

【あらすじ】

本当に偶然で死んだ男が死亡フラグ満載の世界で生きるお話。

＊この小説はただいま放送中のF a t e／Z E R Oにはまってしまった為書いてしまった小説です。

転生する理由？それは知らない。（前書き）

本当にFate／ZEROに感化されて書きました。

いや、マジで。こっちはBSでなければ見れませんし……早く金曜日になれ!!

転生する理由？それは知らない。

あれ、ここ何処？

「ようやく目が覚めたようじゃな」

あれ？アンタ誰？

「わしは神じゃ、と言っても最近は何にも信じられないんじゃガナ」
マジデ？

「マジナノジャ！！まあ下級神なのだがな」

「……………」

「まあ欲しい能力と、欲しい物を言え、それ渡すから」

「……………どこの世界？」

「F t a eの世界じゃ、他にも転生者が居るガの、3人くらい」

「なら先に年齢は士郎より7歳年上にして欲しい」

「……………以外じゃな、ハーレムとか要らないのか？」

「いない、むしろ俺はハーレムが嫌いだ、士郎はセイバーとくっ付け」

「じゃあ次に能力は「ブラックキャットのイブの能力」早いな」

「この能力は憧れだからね、欲しい物はBLEACHの残月と侘助、Dグレのノアの箱舟、それとネギまのダイオラ魔法球、その中にトリコの生物が居るようにして……それとグルメ細胞が生まれながら持つてるようにして、後は暴走と勝手に願いを叶えないジュエルシードと暴走しないレリック、後は悪魔の実でトリトリの実モデルフェニックスで、もちろんカナズチにならないやつで……後はヒイロカネとオリハルコンを」

「本当にそんなものでいいのか？」

「ああ」

「じゃあがんばれよ、子孫よ！」

「はっ!!!? なにとんでもない事をカミングアウトしてんだよ!!!」

あれから十四年……

本当に長かったようで短かった生活だ。

どうやら変身は……ナノマシンは魔術回路にすら作用するようで、元々持っていた魔術回路17本が増えた……今は51本。やっぱり増やすのも限界があるらしく3倍までらしい……それでも凄いよ、ただ魔術が強化と幻術だけしか使えなかった。まあマジで難しいから分らなかった。

今は箱舟のなか……ダイオウ魔法球は本当に凄いよ……トリコの世界の生物美味しかった。

残月と侘助は宝具だった、残月はB十、侘助はB……

箱舟は姿を消す事が出来る為今はいいはず……そして箱舟はEX。

そういや世界の修正力は俺たちに何にもしてこないがようやく分かった。

神様達は根源のようなものだったからだ。

「まあ、今は如何すれば良いんだろう……」

そう言って手のひらを見る。

そこにはあざがあった。

簡単に言ってしまったえば令呪だ……

どうしてこうなった!!??

しかも今は第四次聖杯戦争間近じゃねえか!!

「……いや、待てそういや今回の聖杯戦争では他の転生者は黙ってみている事すらしてない。

恐らくハーレム狙いだろう。」

「まあ良いか、災害が起きることを知ってるんだ、食い止めないと……」

そう言っ外に出た。

今は夜だったため誰もいない柳洞寺だ。

よし、サーヴァントを召喚しよう。

取り合えずジュエルシードを持って髪を

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我、クビア

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

身体に魔力が走る、それは不快感……

身体が焼け付く……それでも言わなければならない……

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

セツト

「――――Anfang」

「――――告げる」

「――――告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ―――！」

転生する理由？それは知らない。（後書き）

転生者一覧

クビア

今作の主人公。

魔術師としては半人前、士郎と同じくらい……
ただし実力はかなり高い、修行ではなくトリコの食材を食べていた
為である。

ハーレムに興味は無し、むしろ嫌悪している。

考え方は「悪より善」である。

転生者達が士郎を嫌う理由は分かるが根本的な部分から相容れない。

転生者達の言う「殺す覚悟」に対し「死ぬ覚悟」と言うものを基準
にして動いている。

前世はお偉いさんの愛人の子供、その為平等に愛する気持ちが全く
分らない、ゆえに惚れたらその人に尽くすタイプ。

人間兵器と狐（前書き）

サーヴァントはあの人？です。

他にもEXTRAのサーヴァントを出したいんですが……、それは五次で

人間兵器と狐

——よし、手応えありだ!!

俺はそう思った、少なくとも何らかのサーヴァントは召喚できてるはずだ。

召喚するための聖異物は無かったけれど、ジュエルシードを一つ使ったのだ、大聖杯から与えられるサーヴァント召喚に必要な魔力を全く使わないで召喚する事が出来た。

これなら原作はあんまり変わらないだろう……………。

さて……………どんなサーヴァントが……

「暫く、暫くう〜〜!!」

甲高い女の声がした……

……………は？

この声どこかで聞いたような……………でも覚えてねえんだが……………

「謂われはなくとも即参上!!サーヴァント『キャスター』。軒猿陵墓から、良妻狐のデリバリーにやってきました!!え〜と、あなたが私のご主人様でいいんですよね?」

青く色っぽい着物を着た狐耳の少女が居た。

あれ?でもこの聖杯戦争じゃあ……………

「う、うん……………」

「あれ?もしかしてキャスターだから気に食わないんですか?」

や、やめてくれえええええ!!!!そんな泣きそうな目で俺を見ないでくれえええええええええ!!!!

……………ってそうじゃなくて……………。

「いや、聖杯戦争では西洋の英霊しか召喚できないんじゃないのか?」

「おや?私が西洋の英霊でないと気付きましたか」

「そんな格好をしてるんだ、それに狐耳と言ったら東洋だ、間違いない」

そう!狐耳は東洋だ!俺はそれ以外認めない!!

「まあそうですね、聖杯戦争なんて何度もやってればイレギュラーが出てくるなんて当たり前ですし」

………凄い鋭い………まあそりゃ当たり前か、何時も正常なんてものはこの世に存在しないし、世界だって修正しようとは思わないはずだからな………

「まあその通りなんだけどね、今回の聖杯戦争事態が狂っててもおかしくないし」

取り合えず俺はキャスターに今回の聖杯戦争の歪を話した。
アヴェンジャーの事、そしてその後起こる出来事を………

「まあコレは予知夢？みたいなものだけど」

「予知夢？」

「うん」

実は俺には前世の記憶が殆ど残っていない、しかも型月の世界に關してだけはものすごい勢いで忘れていったのだが………。

「なんかたまにだけど未来とか過去とか見ることが出来るんだよ、ここ最近は制御できるけど………」

「………そうなんですか？」

「うん、まあ寝ないと出来ないんだけどね」

言ったとおりこの世界に来てから、魔術を使えるようになったときからだ。
だが魔力は消費しないのだ、ここ何年かは仕事の相棒だった、本当に助かった。

「まあ、これからよろしくね、キャスター」

場所は『箱舟』、その部屋の一室でクビアは寝ていた。

そこは洋室で歴史があり伝統を感じさせる部屋だった、そこにベツトが置かれており、眩しくはあったが生活するのにも適しており、^{マナ}大源が大量にあるのだ。

『箱舟』の恩恵があればまず間違いなく勝ち進めるだろう、だが念には念を入れるため、キャスターは自分のスキルである陣地作成を使つて早速工房を作っていた。

キャスターである彼女の陣地作成はC＋とかなり低い、だがそれでも『箱舟』の恩恵を使えば更に広がった。

「ふう、コレで終わりですね」

先ほど陣地を作成し終わったばかりのキャスターは少しだけ肩の力を抜き、座り込んだ。

「まあマスターはまだ子供ですけど一応当たりですしね」

そう言って寝ているクビアを見た。

「……………一体どんな目にあえばあそこまで魂が壊れるのか……………」

キャスターには分かったいた、クビアが歪んでいる、否、完膚なきまでにどうしようもないほど壊れている事を……………。

「まあどうしようもないほど優しいんですけどね」

場所も変わり、どこかのお城……………。

「…………切嗣？」

白く美しいアルビノの女性が未だ明かりがついている部屋に来た。
女性の名はアイリスフィール・フォン・アイツンベルン、聖杯と言
う名前の贋作を作り出した御三家の内の一角、アイツンベルン家の
ホムンクルズだ。

部屋には草臥れた男、衛宮切嗣だ。

切嗣は一枚の書類を見て顔を顰めていた。

「…………暗殺者」

その書類には、幼いクビアの写真があった。

その目は……………全てを諦めたかのような色をしていた。

——アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

そこには金髪で赤目の少年がいた。

その少年は身体中から血を流し……………何かに拘束されていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1617y/>

Fateに転生、惨劇回避

2011年11月21日07時00分発行